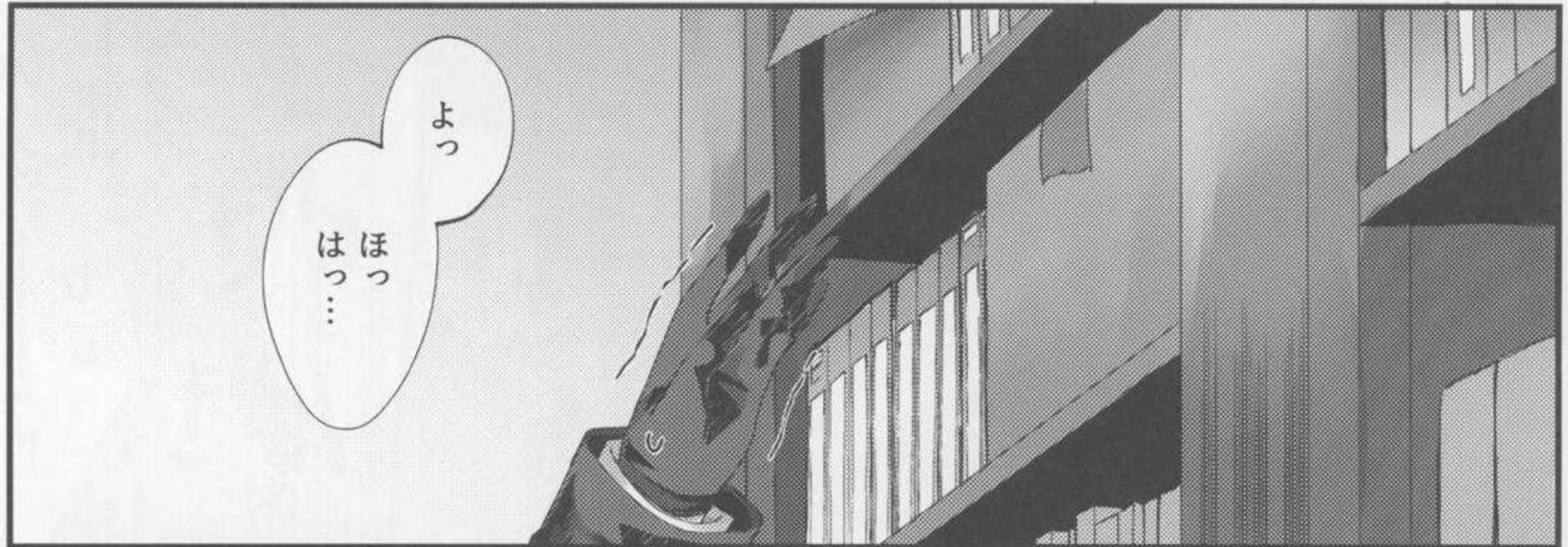


ADULT ONLY R18  
CONTENTS INCLUDE

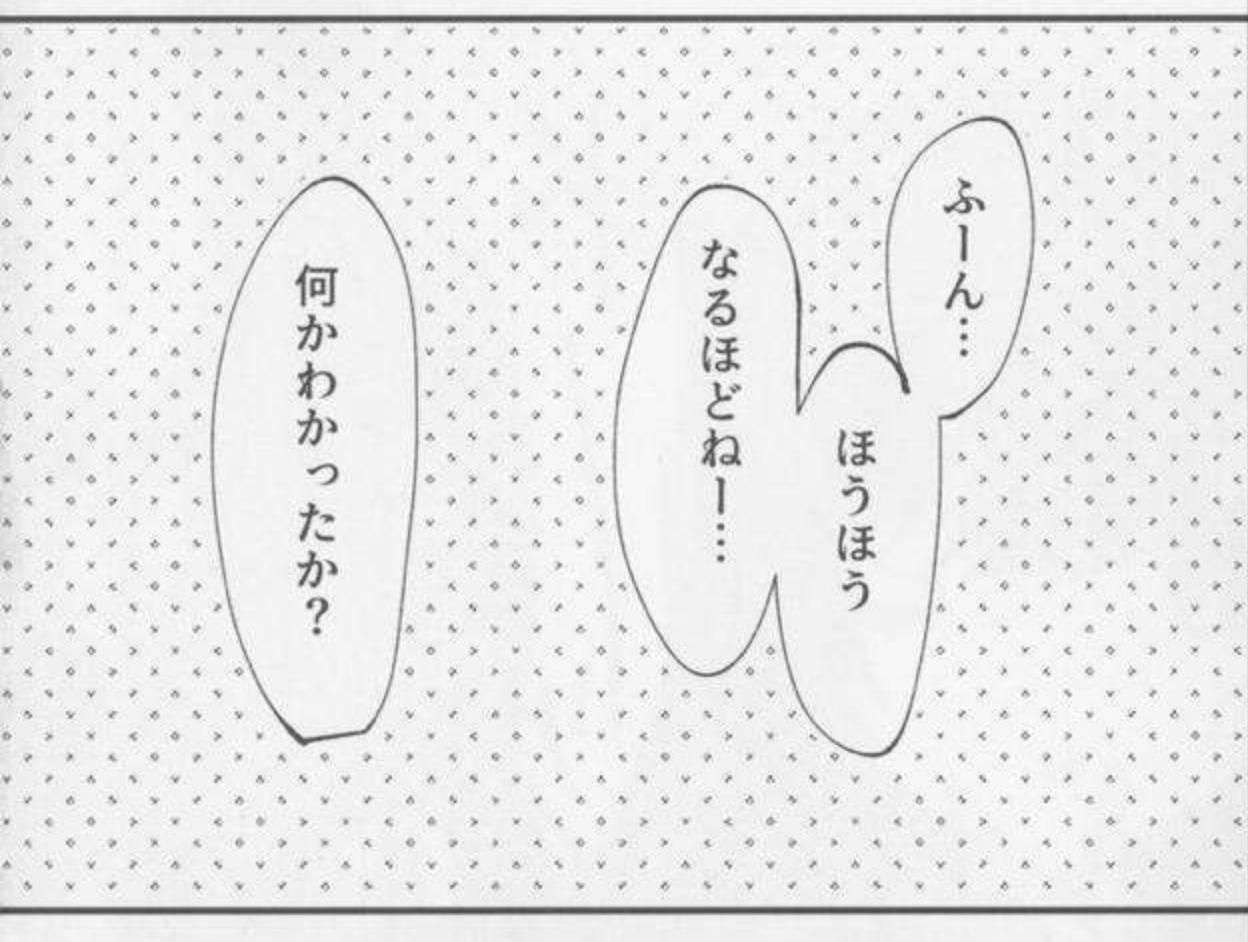
Arknights Unofficial fanbook  
Presents by Hibiscus

Angel Temptation  
ビジュアルテンパーション









ね、ドクター  
これ私が預かっていてもいいかい?



それら以外に  
精神面に作用するアーツも  
あるってことさ

…精神…

…洗脳や  
催眠の類か？

おつ  
さすが鋭いね  
ドクター

そういう感じ：  
というかほぼ正解だよ

いわゆる  
性行為のための  
アーツ学だね

な！？

あ、

ま、答えを言っちゃうと

これに書いてあつたのは  
精神に作用して性的興奮の助長、  
性感帯の開発、感度の増幅…

ほほ正解♪

何だこ?





モ、ス…っ

ソク…

あと

君が私から  
逃げられると思つた？

も、もうひとつ…？

逃げようとしたバツとして  
君にもうひとつ  
アーツをかけさせてもらったよ

それは…

これは全身の感度を上げる  
アーツらしいよ

ふふつ  
いい声だね、ドクター  
触れた時の感度が  
何十倍も跳ね上がるらしいけど



じやあ、ドクター

楽しもつか?

まさか肌に触れただけで  
こうなっちゃうなんて…ね?

ひっ!?

な、なんだ…つ  
今…つ

つう…

ひく。

ふふつ  
いい声だね、ドクター





敏感に…つ



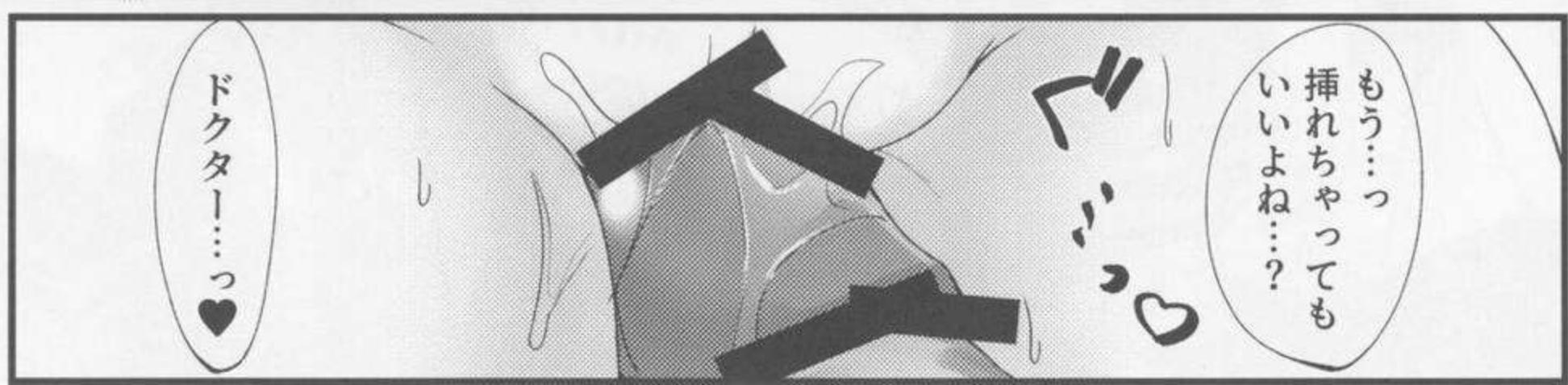
ひくひく

す  
こ













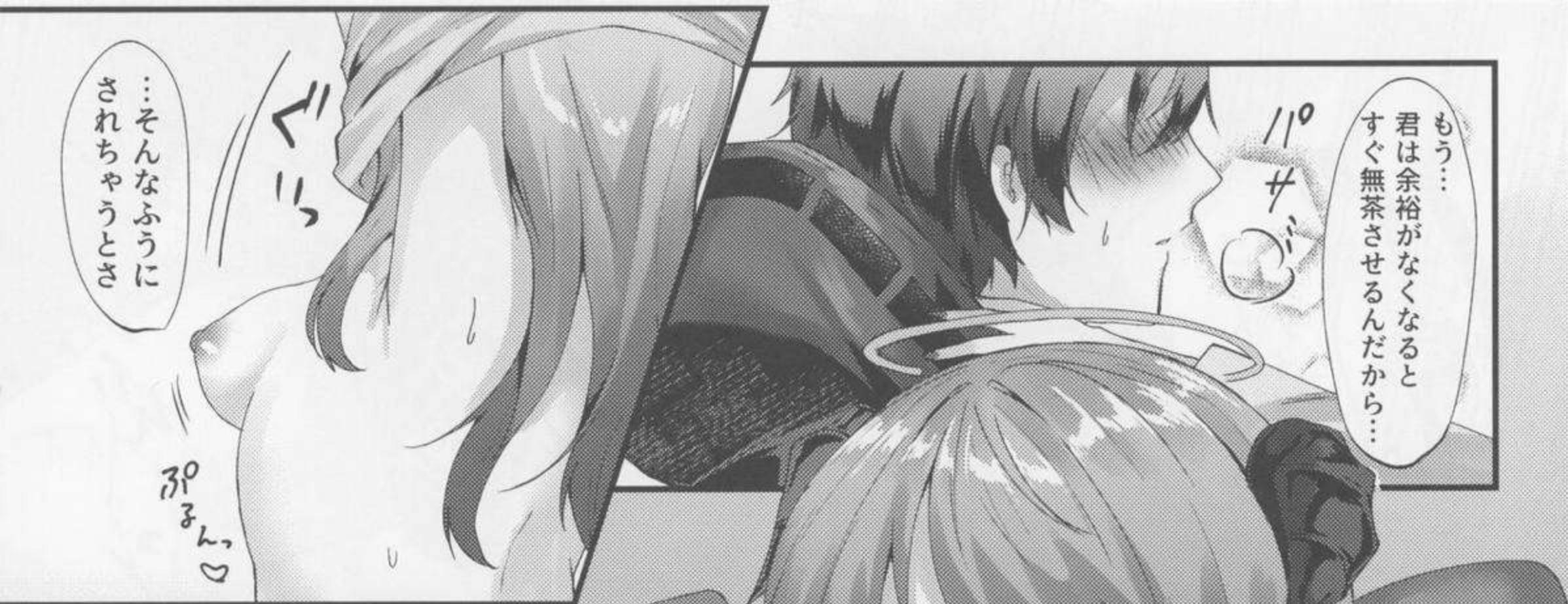


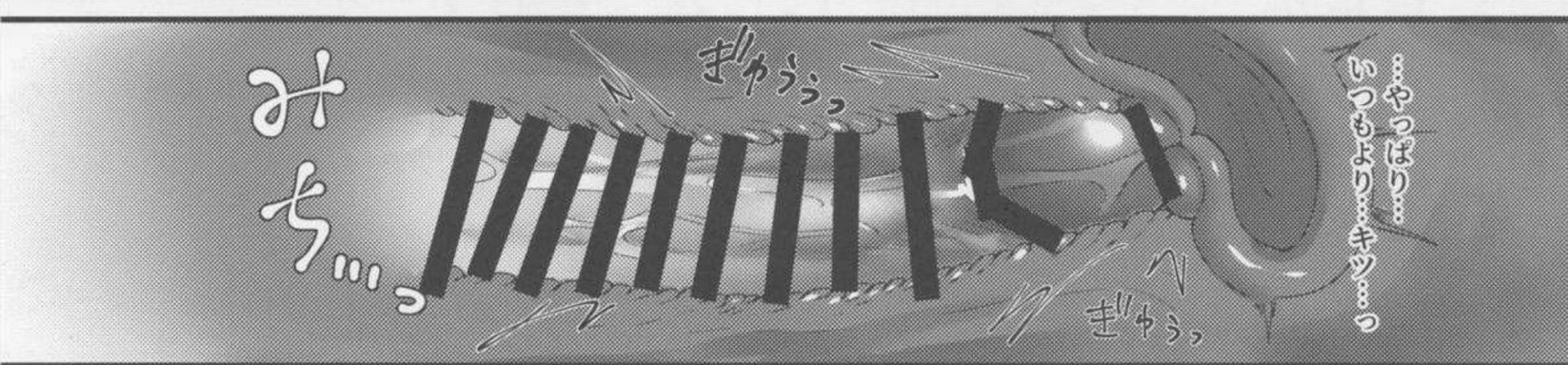














…ドクター…

アーツのせいだけじゃ  
ないかも知れないな

スリ

こつ  
ん

わよー

はよ

こんな気持ちいいのは

…ドクターだから

こんなに…  
温もりを感じるのさ

きゅ

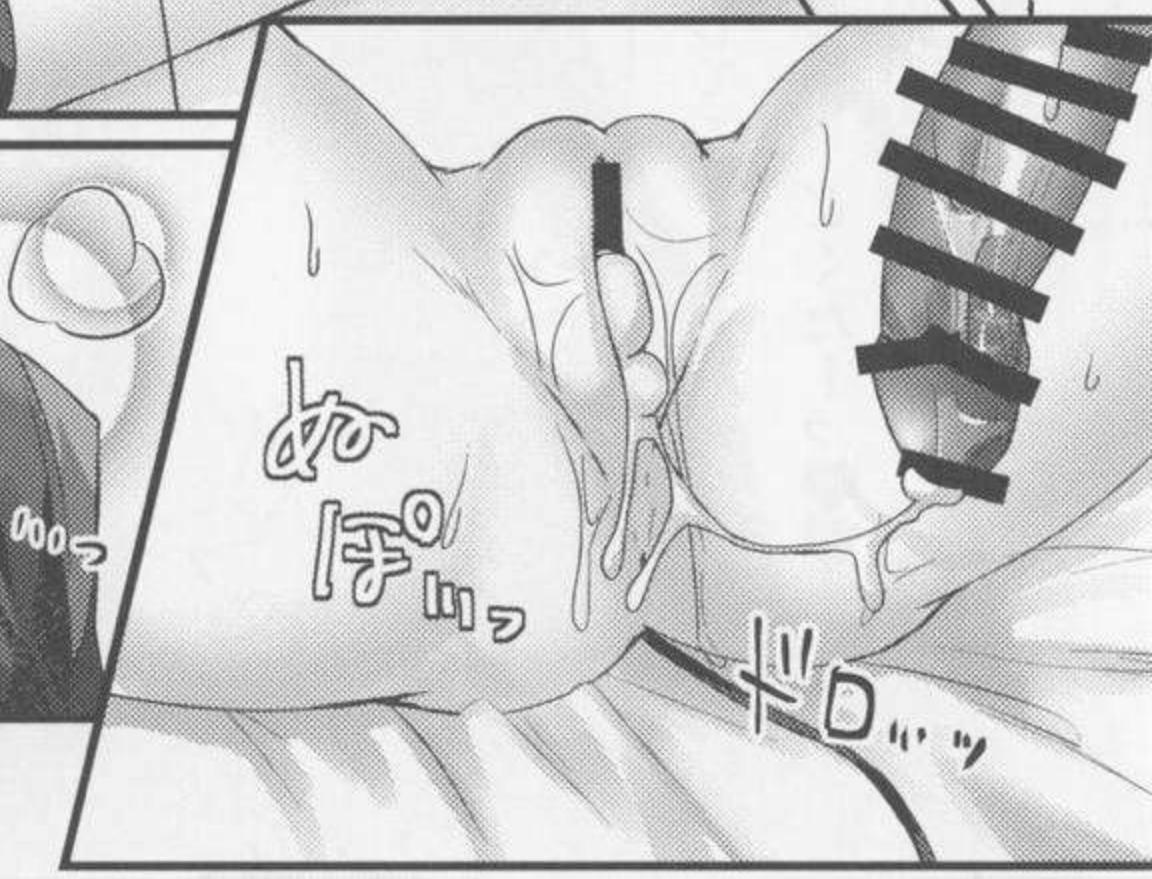
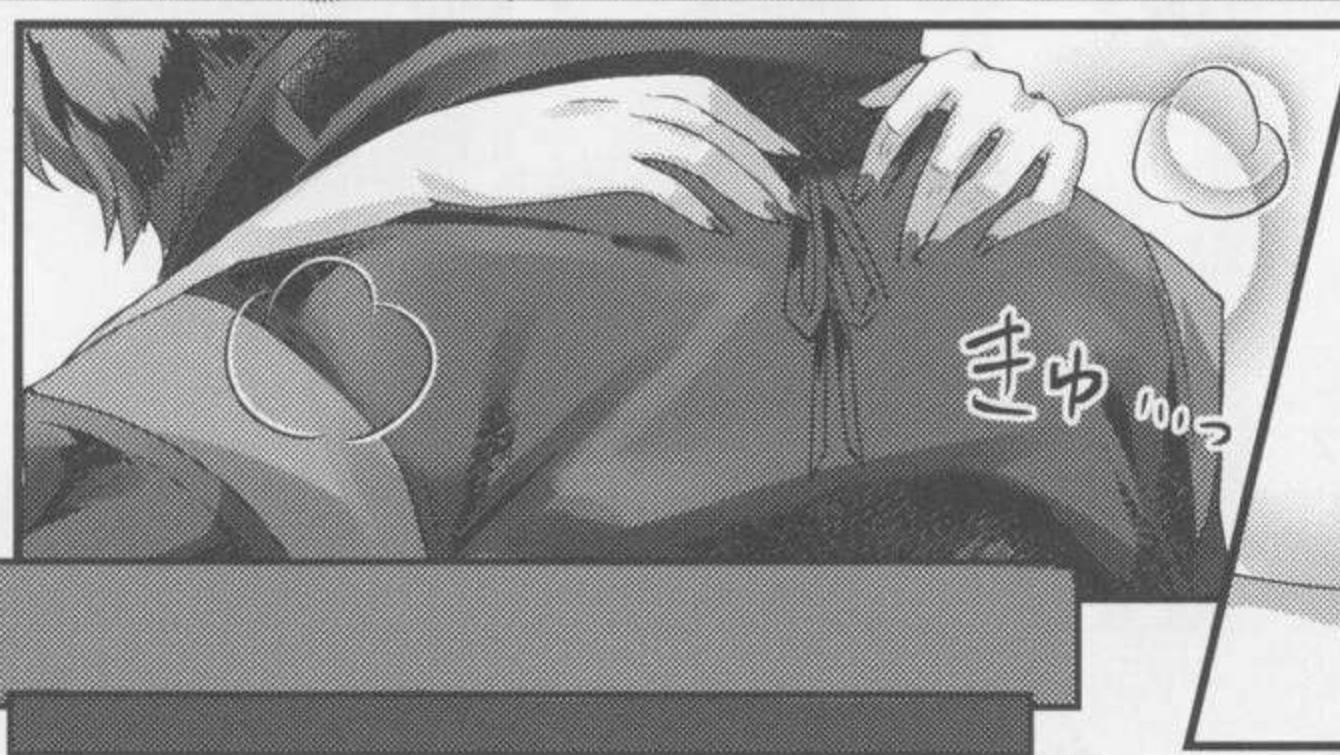
わよ

わよ

よ









稻沢 みんと

イマ

「オッケー、私は平気だよ

私は大好きなドクターと一緒にいる事ができたら、それだけで充分幸せだからね

「ぶふうつ！？！」

あまりにも直球すぎる言葉のせいで、飲んでいたアイスコーヒーを吹き出すドクター。

「あらら、布巾持つてくるね」

「……すまない」

吹き出したコーヒーを拭き取つてもらい、そのまま業務に戻るの

であつた。

「海水浴に行きたいなって思つたんだけど、どうかな？」  
「ふむ……」

今の時期は夏、一週間の天気予報もしばらくは晴れマークのみで、海水浴をするには絶好のチャンスと言える。  
しかも幸いな事に今の中堅からシエスタが近い（シエスタにあるのが海なのかどうかはさておき）。今すぐでも支度をして行きたいところではあるが、問題が山積していた。

（困ったな……）

そう思いながらドクターは現状の問題を二つ思い浮かべる。  
二日後の朝、シエスタにあるプライベートビーチに来た二人。

「ああ、そうだな」

カンカン照りの太陽と、美しく輝く白い砂浜。最高の海水浴日和だ。

「ところで日焼け対策はしたのか？」

「まだなんだよね、塗ってくれるかい？」

「……わかった」

ビキニ姿のモステイマは、そのままパラソルの下にある大きめのビーチ用のマットにうつ伏せになつた。

「頼んだよ、ドクター」

「……わかった」

「頼んだよ、ドクター」

日焼け止め液を手に出し、ゆっくりと彼女の身体に塗つていく。

首筋、腕、背中、腰……満遍なく馴染ませていく。

「……あまりデートらしい事はできないが、それでもいいか？モステ

を何度もできる程ドクターの財布に余裕は無かつたのだ。

勿論、恋人である彼女と過ごすひと時は格別である。だが、それ

を何度もできる程ドクターの財布に余裕は無かつたのだ。

「……あまりデートらしい事はできないが、それでもいいか？モステ

「んう……んつ……」

時折、彼女の妙に艶のある声に理性が揺さぶられる。

駄目だ、いくら人目のないプライベートビーチとはいえ……そんな思考を溶かすように、彼女は身体を仰向けにする。

「こつちもだよ、ドクター」

「わかっているさ」

堪えろ……そう自分自身に言い聞かせながら、もう一度日焼け止め液を彼女の身体に塗っていく。

「こっちが塗れてないよ？」

手を掴まれ触られたのは、ビキニで覆われた胸の部分。

「……びっくりするからやめてくれ、モスティマ」

「その割には満更でも無さそうな顔だつたけどね」

「違つ……そんなことは！」

「ドクターフてば、素直じやないんだから」

最後に胸を塗り終えた所で、彼女はドクターの耳元で囁いた。

「後で……しょっか」

「……つ……」

空いた手で優しく股間を撫でられれば、むくむくと自身の欲望が膨らんで。

（ああ、また私は……彼女の誘惑に負けているのだな……）

そう思いながら、波打ち際に向かうのであつた。

ドクターの目線の先では、モスティマが楽しそうに海水浴をしている。

「ドクター、入らないのかい？」

「私はこれぐらいで充分だ、モスティマの楽しそうな姿を見るだけで

幸せだからな」

「ふうん……？」

溶けるような暑さとはいえ、海水はやはり冷たい。

「……足だけ軽めに入る程度でいいか」

なんて一人で呟いていると、彼女が近づいてきて、自分の腕を強く引っ張った。

「ぐおつ！？ わわわっ……うわあつ！」

バッシャアアアン……！ と豪快に全身に海水を被る。

「せつかくならめいっぱい楽しまないとね？ ドクター」

「ゲホッゲホオツ！ やつたなあ……モスティマ！」

「きやつ！」

全身が濡れて吹っ切れてしまつたのか、先程と打つて変わつてしまやぎ始めるドクター。

「そうこなくつちやね、ドクター？」

「はは……そうだな」

その後も彼女と一緒に、最高の時間を過ごした気がする。

「ドクター、いくよ？」

「おつとつと……それつ！」

「わつ……トスが上手いねえ

「それなりにな」

めいっぱいに海水浴を楽しみ、ビーチバレーを軽くやって。

「モスティマ、肉が焼けたぞ」

「ありがとうございますドクター、いただきます」

海辺でやるバーベキューは、なんだか特別な気がして。

「美味しいよ、ドクター。」

「お金が足りないと言つてた割には、随分奮発したね？」

「……まあ、な」

しばらくは節制を強いられるだろう。

だが、こうして楽しんで二人の大切な思い出になるならそれで良い。

何より、彼女が幸せそうにしているのが自分にとつて嬉しいことこの上ないのだから……

「ふう……美味しかった」

「ああ、私も美味しかったよ」

「食後の運動しないとね……ドクター」

「……わかった」

後で、しょ……？――後――という時間は、今この時間で。

そのまま、ドクターはモスティマにゆっくりと押し倒される。

「んっ……」

「彼女からのキス。」

「んむ、んっ……」

キスだけでむくむくと膨らむ自分の欲望に恥ずかしさを覚えつつ

も、彼女の誘惑に溺れていく事を望む。

「私も我慢できない……いい？」

「……」

無言のまま頷き、許可を与える。

水着を脱がされ、欲望が丸出しになる。

「ん、ちゅ……んふう……」

「う、あつ……」

暖かい口内の感触に思わず声が漏れてしまうドクター。

「んふ、ん……れろれろ……んっ……」

「モスティマ……」

「彼女の名前を呼ぶ。」

「ん……ん、ちゅ……」

「……」

目の前で愛おしそうに自分の欲望を咥えるモスティマ。

初めて彼女と愛を確かめあつた時から、この姿は変わらない。

もつと……もつと……彼女を愛したい。

彼女の誘惑に溺れる程、愛情は天井を知らぬままに増していく。

「んふう……れろれろお……んっんっ」

「ぐつ……それはヤバいっ……」

舌先でカリをなぞられ、白い欲望を欲しがるように吸いつく……

堕天使の誘惑の口淫。

「うあっ……出るっ……！」

びゅるるるつ……びゅうつ……！限界を超えて、白い欲望が吐き出される。

「んう……んっ、んふう……」

その全てを飲み、愛情として受け止めるモスティマ。

彼女の身体もまた、ドクターの誘惑に溺れていた。

「ドクター……もう我慢できないや」

「……私もだ」

未だそそり立つ欲望の上に跨り、水着を少しづらす。

海水では無い、とろとろの彼女の愛液が零れ落ちる。

「んっ、んんっ……んっ……！」

「うつ……あ……締めつけが……」

パラソルの下で、二人は一つになる。

「はあ……はあ……」

「はあ……ん、モスティマ……」

「ドクター……」

騎乗位の体勢で、お互に名前を呼び合う。

「……んっ、あっ……あっあっ」

動くよ、なんていう確認はもう要らない。

指を絡め合うように両手を繋ぎ、腰を振り始める。

「モスティマつ……好きだつ……」

「私も……好きつ……ああんつ……！」

ぱちゅん……ぱちゅん……ずつちゅずつちゅ……

「あつあつ、この体勢つ……好きなところがいっぱい擦れるつ……気持

ちいいつ……」

「そうかつ……私も……気持ちいいよつ……」

「ドクターツ、ドクターツ……」

「モスティマつ……」

「モスティマつ……」

「……！」

身体中に甘ったるいスパークが駆け巡り、頭がぼんやりしてしま

う。

「……大丈夫か？」

「うん、大丈夫……」

そんな事、聞かなくてもいいのに。

ドクターの誘惑に、また溺れてしまうから……

ずちゅつずちゅつずちゅつ……再び腰を振る。

「んんんっ……気持ちいいっ……！」

「モスティマつ……私も……うあっ……！」

「ドクターツ……好きつ……大好きつ……！」

「私も、好きだつ……モスティマ……！」

びゅつ……びゅるるつ……

子宮の中に流れ始める、純白の愛情。

びゅるるつ……びゅつびゅつ……！……どびゅどびゅつ……！

「……！」

「……！」

波の音に、二人の声はかき消された。

「ドクターツ……」

「モスティマつ……」

対面座位になり、お互いに抱きしめあう。

「……すまない、モスティマ……まだ足りないみたいだ……」

「ふふ、仕方ないなあ」

「尻尾は正直みたいだぞ」

「……バレちやつたか」

再び落ち着いた波打ち際をよそに、愛を確かめあう。

「んむ……ん……ちゅ……」

「んむ……ん……んつ……」

ずちゅ……ずちゅ……さざ波のような優しいストローク。

「んふつ、んつ……れろつ……」

「れろれろつ……んつ……」

ぱんつぱんつぱんつ……

時折激しい波を起こしては、さざ波に戻り……

「んつ……ぶあ……ドクターツ……」

「ぶあ……モスティマ……」

波に攫われた私達は、誘惑の海へと溺れていく……

愛してる……愛してる……どこまでも、深く、深く。

「大好きつ……」

「大好きだ……」

ドクターツ……モスティマ……

「んんんっ……！」  
「うあっ……っ……！」

絡みつく愛液は、ドクターを。  
中に溢れる愛情は、モスティマを。  
何処までも、二人は溺れていくのだった。

数日後。

「おはよう、ドクター」  
「おはよう、モスティマ」

いつもの執務室、いつもの挨拶。

彼女がいる事で、今日もドクターは元気十分だ。

……だが、前と変わった事が一つ。

「気をつけて行つてくるね、ドクター」

「ああ、行つてらっしゃい」

「……んっ」

ドクターとモスティマしか知らない、秘密の任務が増えたのであ  
つた。



あとがき

こんにちは、飴崎ばにらです。夏コミです。  
本をお手に取って頂きありがとうございます。  
3冊目の博莫本です。  
稻沢は夏らしいの書いてたのに  
めっちゃ夏に関係ないのを描いちゃいました。  
水着コーデとかくれば描きたいんですけどねえ~

今回は前回よりエッチ度増し増して描くよう意識しました。

じぶんでいうのもなんですが、以前より色々パワーアップしてると 思います。楽しんでいただけたら幸いです。

それではまた会う日まで。

## レミュアンの実装まだ?

おはようございます、こんにちは、  
こんばんは、はじめまして、  
稻沢みんとです。(クソ長あいさつ)  
まずはこの同人誌を手に取ってくれた方へ、  
ありがとうございます！

### テーマ「海」

……物凄く単純明快！  
というか、こういう時だけしか  
小説書けてないのは良くないよ。  
稻沢みんとさん、もっと頑張ろうか……

という事で、pixivであくないつのSSを  
なんか書きます。  
今年中に出来てなからたら土の中に埋まりますので、  
何卒よろしくお願ひします。  
それではまた。

漫画担当 飴崎ばにう



@789u7



ID=737847

小説担当 稲沢みんと



@Inzwmnt



ID=95685533



# Angel Temptation

発行日：2023年8月12日(C102)

発行元:はいびすかす(飴崎ばにら・稻沢みんと)

hbc.bowl22@gmail.com

印刷:あかつき印刷さま

※本の無断転載・複製・アップロードを固く禁じます。



ARKNIGHTS  
3RD UNOFFICIAL FANBOOK  
DOCTOR X MOSTIMA  
PRESENTS BY HIBISCUS

